

生物環境科学研究センター及び谷戸の水路における環境評価

10108141 藤田浩大

1. 研究の背景

日本では氾濫原の自然、里山、干潟などヒトの生活域での生物多様性の喪失が著しい。川の周りや水田、あるいは湖沼やため池に残っていた氾濫原の名残の自然は、この数十年間に実施された様々な公共事業によって環境全般の悪化や管理放棄の影響を受けて失われた(鷲谷、1998)。

そして日本大学生物資源科学部生物環境科学研究センター(以下 CNES)は建設の際、盛り土をしたことで沢に滝が出来てしまい天神谷戸との水環境の連続性が失われてしまった。生物の生息地が繋がっていなければ、他へ移動できず餌のとれる範囲が限定され、また交尾の相手も限られてしまう。そこで本大学による CNES 谷戸の土地購入に伴って水環境の連続性に考慮した新たな水路施工の計画がある。

2. 研究の目的

水生生物の生息に配慮した新たな水路施工にあたり、現状の生物相を把握しておく必要があり、これは施工後に行うモニタリング調査の際にも必要なデータである。そこで本研究では、そのための CNES から天神谷戸における水環境、生物環境の把握を目的とする。

3. 調査地概要

調査地点は CNES から天神谷戸に流れる沢の 9 地点で、各調査を行った(図 3-1)。A 地点は天神側谷戸(図 3-2)、A 地点から上流に向かって B~D 地点を設定した(図 3-3、3-4、3-5)。E 地点は太いパイプからの排水で、F 地点は細いパイプからの排水である。(図 3-6)G 地点には水量も計測するために三角堰を設置した(図 3-7)。H 地点は 5 年前に整備されたビオトープ池(図 3-8)、I 地点では地下から水を汲み上げており、調査する流路の源流にあたる(図 3-9)。

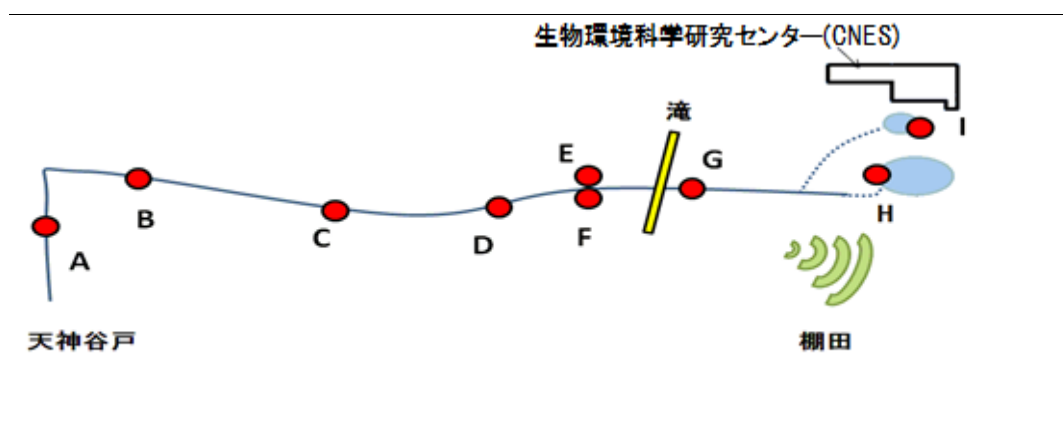


図 3-1 :調査地概要図